

Poe と Hawthorne の関係 (その2)

— 1842年 - 1846年 —

松 山 信 直

ポーの1842年と1847年の二つのホーソン論¹はかなり有名だが、1842年に始まって1847年に終わる二人の関係には、ポーの研究家もホーソンの研究家も従来あまり関心を向けなかった。この小論は、ポーとホーソンの関係を考察する一環として、すでに発表した「“Something which resembles Plagiarism” — Poe と Hawthorne の関係 (Poe の1842年の Hawthorne 論)」²に続いて、1843年以降の二人のかなり屈折した関わりを眺めてみるものである。

Graham's Magazine の1842年4月号と5月号に掲げたホーソン論で、ポーは短編作品の理論的根拠を提示すると同時に、ホーソンの *Twice-Told Tales* の第二版を激賞して、ホーソンの才能を非常に高く評価した。ところが、ポーはその一方で、ホーソンの欠陥と思われる「多様性の欠如」(42/4, XI, 103) を控えめながらも指摘し、さらに、ポーが「ずうずうしい派閥」(42/5, XI, 110) と呼んで嫌悪するロングフェロー (H.W. Longfellow) やエマソン (R.W. Emerson) を中心とするニューイングランドの知識人・文人とホーソンとのつながりに嫌疑をかけていたことをもらし、その上ホーソンに自分の作品から「何か剽窃に似たこと」(42/5, XI, 112) を犯した疑いがあることを指摘した。だがこの剽窃問題は、ホーソンの剽窃ではなく、ポーの方の剽窃が疑われても仕方が無いような事態であり、さらに、ホーソンの剽窃を指摘した評論を掲げた同じ号に、ホーソンの作品に負うところが大きいと思われる自分の作品を掲げてしまうというポーの作

為的な裏の行為と思われることもあった。今回の論文では、この1842年のポーのホーソン論以後、1847年の第二のホーソン論に至るまでの二人の関係を眺めてみることにする。

I 1842年・1844年

i ホーソンの“The Hall of Fantasy”

1842年の4月と5月に発表されたポーの *Twice-Told Tales* の評論に対して、ホーソンが直接どのような反応を示したのかは明らかでない。だが、1843年2月の J. R. ローウェル (Lowell) が編集した文芸雑誌 *Pioneer* の第2号に載せた“The Hall of Fantasy”で、ホーソンは批評家としてのポーについて短いながらもかなり厳しい言い方をした。

“The Hall of Fantasy”は、証券取引所を思わせるような、大きな、しかもギリシャ風、ゴチック風、東洋風の様式が混ざった大建築物の Hall of Fantasy を語り手が訪れ、案内者に導かれてこの殿堂に収められている過去の天才達の銅像や胸像を見たり、この殿堂に入ることを許された現在の文人達や、実業界の人々、発明家、改革者などの間を巡って、これらの様々な人々について話を交わすことになっている。アメリカの現代作家に触れた部分は、*Pioneer* に掲げた版では、実名をあげた寸評になっていて、語り手はブライアント (W.C. Bryant) やアーヴィング (Washington Irving) やクーパー (J.F. Cooper) などに言及した後、何人かの当時の群少作家にも触れて、ポーにも言及した。

この作品は後にホーソンの第二の短編集 *Mosses from an Old Manse* (1846年) に収められたが、その時、アメリカ作家についての言及は大部分が削られ、ポーに関する部分も省かれてしまっていて、多くの読者の眼にとまらなくなっていた。ホーソンのオハイオ州立大学版の全集によって、この削除された部分が明らかになったが³、ポーについてはこの殿堂入りに関して、次のように言われていた。

“Mr. Poe had gained ready admittance for the sake of his imagination, but was threatened with ejection, as belonging to the obnoxious class of critics.”⁴

1843年頃までにホーソーンがポーのことをどれほど知って理解していたかは明らかでないが、この批評家としてのポーについての厳しい言及は、1842年4月と5月のポーの *Twice-Told Tales* 評に対するホーソーンの反応と考えるとよいだろう。ホーソーンが必ずしもポーの批評を好意的に受け止めていなかったことは、先の論文で述べたように、ポーが指摘した「多様性の欠如」と「ずうずうしい派閥」との関わりの嫌疑にあったのではないかと思われる。

一方、ポーは当然ホーソーンのこの作品を読み、自分についての寸評に眼をとめたに違いない。ポーは自分についての見解や評判には非常に過敏であったらしいから⁵、恐らく、前半については大いに満足し、後半については、くやしがつて腹を立てた、という複雑な反応を示したに違いないと思われる。だが、直ぐ後で触れるように、丁度この頃ポーはローウェルと文通を始めたばかりで、自分についての寸評に関して、ホーソーンに対しても編集者のローウェルに対しても何も言わなかったが、批評家としての自分について厳しい言い方をしたホーソーンに対して微妙なアンビヴァレントな感情を持ったことは、容易に推測されよう。

さらに、この作品にはロングフェローについてホーソーンの友情と尊敬を示すような言及もあって⁶、これを読んだポーは、ホーソーンとロングフェローのつながりの濃さをはっきりと認識したに違い無く、先の批評家としてのポーについてホーソーンが与えた寸描と合わせてみると、彼の意識の奥底には、ホーソーンはやはりかねて疑っていた「ずうずうしい派閥」の一人ではないかという疑念がこびりついたように思える。

ii James R. Lowell とポーの原稿依頼

ポーはかねてからローウェルの詩を高く評価していた⁷。ポーはローウェ

ルが文芸誌 *Pioneer* を発行することを知って、1842年11月に手紙を寄せ、雑誌の成功を祈ると共に定期的寄稿者になることを申し出た。ローウェルは直ぐさま快諾の返事を書いて、二人の間に文通が始まった⁸。ローウェルの *Pioneer* 誌は1843年1月に刊行されたが、2月4日付けでポーはローウェル宛に私も自分自身の雑誌を刊行することを夢見ていると書き、常時の寄稿者として頼みたいと考えている人に、ジョン・ニール (John Neal) のほか数人と共に、ホーソーンの名を掲げた⁹。同年3月の末に、ポーはローウェルに7月の初めに *The Stylus* という月刊誌を刊行する予定であることを告げ、この創刊号のために短い原稿を寄せてもらうようホーソーンに頼んでくれと依頼した。そして、この雑誌にはアメリカの文人の短評と肖像をシリーズで載せる積もりなので、ローウェルの資料と肖像画を送ってくれる様に頼むと同時に、ホーソーンのも貰ってくれないかと頼んだ。ポーは勿論ホーソーンと面識はなく、ローウェルとも手紙のやりとりで知り合っているだけの間柄だったが、ローウェルにこのような依頼をする言い訳として、「あなたがホーソーン氏と親しいという事に基づいて私が話を進めさせて頂いていることにお気付きでしょう」と述べた¹⁰。ポーがこのように言ったのは、先に触れたように、2月に出版されたローウェルの *Pioneer* の第2号にホーソーンの “The Hall of Fantasy” が載っていたからに他ならない。

このポーの頼みに応じてローウェルはホーソーンに原稿を依頼し、ローウェルは4月17日に、ホーソーンは一・二週間のうちに原稿を送るそうだとポーに知らせた¹¹。このことは、ホーソーンがホーソーンに宛てた同日の手紙に依っても明らかだが¹²、ローウェルは5月8日になって、ホーソーンから作品を送ってくるのを毎日待っているとポー宛に告げただけでも¹³、ホーソーンはこの約束を果たさなかった。日付は明らかでないが、ホーソーンはローウェル宛に、次のような、頼まれていたポーの雑誌向けの原稿は今書けない旨の手紙を書いている。

“I am greatly troubled about that contribution for Mr. Poe.

Hitherto, I have never been accustomed to write during summer weather, and now I find that my thoughts fly out of the open window, and will not be enticed back again. . . . If I am to send anything to Mr. Poe, I should wish it to be worth his reception; but I am conscious of no power to produce anything good, at present. When you write to him, do make my apologies and tell him that I have no more brains than a cabbage—which is absolutely true. He shall hear from me after the first frost—possibly sooner.”¹⁴

ここで念のために、ホーソーンが1843年初頭から44年にかけて発表した作品を表にしてみると次のようになる¹⁵。(S=*Sargent's New Monthly Magazine*, P=*Pioneer*, DR=*Democratic Review*, BGM=*Boys' and Girls' Magazine*, GM=*Graham's Magazine*, GMLB=*Godey's Magazine and Lady's Book*)

1843年1月

“The Old Apple-Dealer” (S)

1843年2月

“The Antique Ring” (S)

“The New Adam and Eve” (DR)

“The Hall of Fantasy” (P)

1843年3月

“The Birthmark” (P)

“Egotism; or, The Bosom Serpent” (DR)

1843年4月

“The Procession of Life” (DR)

1843年5月

“The Celestial Railroad” (DR)

1843年6月

“Buds and Bird Voices” (DR)

1843年8月

“Little Daffydowndilly” (BGM)

1843年12月

“Fire Worship” (DR)

1844年1月

“The Christmas Banquet” (DR)

1844年3月

“The Intelligence Office” (DR)

1844年5月

“Earth’s Holocaust” (GM)

1844年6月

“The Artist of the Beautiful” (DR)

1844年7月

“A Select Party” (DR)

“Drowne’s Wooden Image” (GMLB)

1844年11月

“A Book of Autographs” (DR)

1844年12月

“Rappaccini’s Daughter” (DR)

この表で明らかなように、ホーソーンは1843年2月以降 *The Democratic Review*¹⁶ にほぼ毎月作品を載せており、その合間を縫って時折他の雑誌にも作品を発表していた。従って、ローウェルからポーの雑誌に原稿を依頼された頃には執筆に手が一杯だったことは事実だった。その上9月・10月に発表した作品が無いということは、7月・8月には執筆していないことを示している。さらにローウェルに手紙を書いた後でホーソーン自身がポーに手紙を書いた形跡も無く、ローウェルを介して作品を送った様子もない。それどころか、ポーの計画していた雑誌 *The Stylus* 自体も挫折してしまい、ポーが作品

依頼を押し進める根拠も無くなってしまった。

この様にして、ポーの作品依頼を通じて生じたかもしれない二人の直接の接触はすっかり消えてしまった。しかし、ポーのこの原稿依頼は、先に触れたように、“The Hall of Fantasy”でホーソーンが批評家としての自分を高く評価していないことを知った上で敢えてなされているわけで、ポーが短編作家としてのホーソーンを非常に高く評価していた故のことだと考えられるが、その一方で、この原稿依頼はポーのホーソーンに対する負い目の裏返しで、ホーソーンに対するポーのかなり屈折した Acknowledgment であるように思える。

と言うのは、先の「Poe の1842年の Hawthorne 論」で見たように、1842年の評論でポーは全くいわれの無い「何か剽窃に似たこと」の嫌疑をホーソーンにかけただけでなく、この評論をのせた同じ号に、ホーソーンの“*Howe's Masquerade*”と“*Lady Eleanore's Mantle*”に負うところが大きいと思われる“*The Mask of the Red Death*”を作画的に載せていた¹⁷。これらのことに対する罪滅ぼし的な意味合いが、ポーの原稿依頼、しかも、批評家としての自分をホーソーンが高く評価していないことを知りながらの原稿依頼にこめられていたのではなかろうか。罪滅ぼし、と言う表現が大仰ならば、先程述べたように屈折した間接的 Acknowledgment の意味を持っていた、と言い換えてもよい。

iii “delicious”な“*Drowne's Wooden Image*”

さて、上に見たように、ポーがホーソーンの原稿を貰う話は突らなかったが、ポーはホーソーンのも後の作品（先に掲げた1843年—44年に発表した作品）には注目していたと思われる。これらの作品の多くは、1846年に出版される *Mosses from an Old Manse* に収録されることになるが、ポーはこれらの作品のかなり多くを雑誌に発表された段階で読んでいたことと思われる。

例えば、*Godey's Magazine and Lady's Book* の1844年7月号に発表された

“Drowne’s Wooden Image” について、ポーはローウェル宛の手紙の中で次のように言及した。

“Do you ever see Mr Hawthorne? He is a man of rare genius. A day or two since I met with a sketch by him called “Drowne’s Wooden Image” — delicious. The leading idea, however, is suggested by Michael Angelo’s couplet:

Non ha l’ottimo artista alcun concetto
Chè un marmo solo in se non circunscriva
To be sure Angelo half-stole the thought from Socrates.”¹⁸

“Drowne” は短編小説である。木の彫刻を機械的にしか作ってこなかった Drowne は、或る日突然、想像力・感受性・創造力の高まりを得て、素材の木に内在していた像を取り出したかのように、生身の女性と見間違えばかりの船首像の傑作を創った¹⁹。この物語は芸術的創造の最高の瞬間の訪れを扱っていて、ポーは先行例があることを指摘しはしたが、“delicious” と行って評価したのも当然だと言える。

このように、ポーはホーソーンを依然として高く評価し、一部の作品を褒めていることをローウェルに語ったけれども、この時期にホーソーンが発表した前掲の作品が、どちらかといえば理念が先行して具象性に欠けるアレゴリー的な作品、例えば、“Egotism” だとか、同傾向の行列・旅行・人々の集まりを扱う作品 (“The Christmas Banquet”; “The Intelligence Office”; “The Celestial Railroad” など)、また、芸術家・科学者をめぐるかなりアレゴリーじみた作品 (“The Birthmark”; “The Artist of the Beautiful” など) が多いということは、その後のポーのホーソーン評に大きく関わってくることになった。ポーには、いかに負い目があっても、批評家として言いたいことは自分の文学観に基づいてずけずけ言うという厳しさがあったと言える。そのため、例えば後で少し触れるような「ボストン戦争」や「ニューヨーク戦争」の一部に見られるような、論争の為の論争としか言えないよ

うな争いを引き起こしたようにも思える。差し控える、遠慮する、という言葉はポーの辞書に無かったと言ってもよい。このような態度は、1844年12月の“Marginalia”にあらわれたホーソーンについての評言にも窺うことができる。

iv ポーの“Marginalia 79”

ポーは1844年11月から“Marginalia”をシリーズで *Democratic Review* に掲げたが、その79 (1844年12月) で²⁰、ポーはホーソーンを高く評価しながらも、すでに指摘したホーソーンの欠陥と思われるものに再び言及し、さらに、「剽窃」の問題を蒸し返した。

ポーは“Mr. Hawthorne is one of the very few American story-tellers whom the critic can commend with the hand upon the heart.”と高く評価しながらも、これに続けて直ちに、「剽窃」の問題を含みとして持たせて、ホーソーンは「テーマ全体の上で常にオリジナルというのではない」(He is not always original in his entire theme.)とあって1842年の評価を変える態度を示し、次のようなカッコに囲んだ文を挿入した。(I am not quite sure, even, that he has not borrowed an idea or two from a gentleman whom I know very well, and who is honored in the loan.)²¹

ここでポーが“gentleman”と言っているのは明らかに自分のことで、“borrowed”云々の件は、1842年5月の書評でポーが言い出した「何か剽窃に似たこと」(XI, 112)がホーソーンにあるという問題である。この“Marginalia”が載ったのは *Democratic Review* だが、既に論じたように²²、ホーソーンの方の“*Howe's Masquerade*”の方がポーの“*William Wilson*”より早くにこの雑誌の1838年5月号に載ったという事実を知らない、という態度をポーは依然として貫いたと言える。このことを以てしても、ポーがホーソーンの方の「何か剽窃に似た」行為、この“Marginalia”の表現を使えば“borrow”した行為、を表に立てて、自分のほうの“borrow”した行為はあくまでも蓋をしておこうと決めていたことは明らかである。

そして、ポーのホーソーンに対する高い評価は変わらないが、欠陥と思われるものの指摘は、1842年5月の指摘よりも精密になっている。ポーは先に示したようにホーソーンは「テーマ全体の上で常にオリジナルというのではない」と述べるだけでなく、上に引用したカッコに囲んだ文の後を、次のように書いている。高い評価と批判の交錯が目される。

but, then, his handling is always thoroughly original. His style, although never vigorous, is purity itself. His imagination is rich. His sense of art is exquisite, and his executive ability great. *He has little or no variety of tone. He handles all subjects in the same subdued, misty, dreamy, suggestive, in[n]uendo way, and although I think him the truest genius, upon the whole, which our literature possesses., [sic] I cannot help regarding him as the most desperate mannerist of his day.*²³ (イタリック体は筆者)

明らかにここでポーは褒めるべきものは褒めるけれども、批判すべきことは臆面無く述べてホーソーンの商品の多様性の欠如を指摘し、ホーソーンを“the most desperate mannerist of his day”と呼ぶ評価を新に加えている。

この評価は、さきほど表題を掲げた1843年から44年にかけてホーソーンが発表した作品の性格・傾向がかなり類似しており、明らかに理念先行型のアレゴリー的な作品が多いことから見ると、正鵠を得たものと言うべきだろう。これはポーがホーソーンを1842年当時のように熱烈に賞賛するのではなく、もっと醒めた見方で、より客観的に、より批判的に見るようになり、言いたいことをずけずけと言った結果だろう。そしてさらに、この批判的な姿勢の背後には、ホーソーンの“The Hall of Fantasy”における批評家としての自分についての寸描、「“obnoxious”な批評家の仲間」にポーが刺激されていたこともあったと思われる。だがポーのホーソーン評の展開にはまだもう一つの段階があり、さらに、マンネリズムの問題が再び繰り返される“The Literati of New York City”の序文(1846年5月)を見なければならぬ。

II 1845年・1846年

i ポストン戦争

1845年のポーは、ボストン中心の文人・知識人を向こうに回して争った感があった。まず年頭から、ロングフェローの編纂した *Waif* という詩集の書評をめぐって、いわゆる Longfellow War を展開した。*Waif* は当時の比較的マイナーな詩人達の作品を含む短詩を50篇集めた詩集だったが、ポーはその書評において、ロングフェローが模倣した詩人達の作品はここに収められていないと主張したため²⁴、この発言に対して、紙上名“H”と“Outis”の二人の論者から批判・反論が寄せられ、ポーがこれに反駁して「剽窃」論争が繰り広げられた。当のロングフェローは、「人生は貴重だから街での口論には加わらない」²⁵と言って公には何も言わなかったため、論争を掲げた新聞雑誌の売り上げはのびたものの、ポーのいきり立ちだけが突出する結果を生み、ポーは盗む行為は許せないとしながらも、“secondary origination”という概念を導入してあっけなく矛を収めてしまった²⁶。

ローウェルとポーはその後も親交を保っていて、ローウェルはポーにポーが嫌っていた *North American Review* に執筆することすら勧め²⁷、また次に述べるように、Boston Lyceum での講演の仲介もしていたが、1845年の8月にポーはこのローウェルを「剽窃」問題で批判した。ところが、その証拠として引用したワーズワス (W. Wordsworth) の詩の中の単語が明らかにポーの読み違いであったために²⁸、ローウェルの失笑と侮蔑を招き、二人の関係は断絶してしまった²⁹。

ポーがローウェルを通じて希望していた Boston Lyceum での詩の朗読会は、1845年10月16日に実現したが、この朗読会でポーは若い頃に書いた詩“Al Aaraaf”をそうだとは断らずに朗読し³⁰、この朗読会を批判した新聞記事にポー自身が反論して騒ぎが起こり、論争は1846年にまで持ち越された³¹。A.H. Quinn はこの出来事を“one of those unfortunate mistakes which

was long remembered to his discredit.”³² と言い、S.P. Moss はこのボストン朗読会とその後の論争を批評家としてのポーの失墜を招いた三つの出来事の一つに挙げている³³。

このように、1845年から1846年にかけてポーがホーソーンの友人・知人やボストンの新聞・雑誌を巻き込む論争を起こしたことは、Longfellow War をもじって、ボストン戦争 (Boston War) と呼ぶことができるだろう。このポーのボストン戦争のことを、ホーソーンがどれだけ詳しく知っていたのかは明らかでない。しかし、後で触れるように、批評家としてのポーについて “obnoxious class of critics” に属すると先に述べたことが間違っていない、という決定的な心証をホーソーンに与えたのではなかろうかと考えられる。

ii “The Literati of New York City”

ポーは1846年の5月から *Godey's Magazine and Lady's Book* に “The Literati of New York City” を掲載した。この “Literati” は、現代作家についての “popular ‘opinion’ ” と “private literary society” で言われている評価の間に隔たりがあることを指摘し³⁴、ニューヨークの文人について自分自身の “unbiased opinion” を述べ、文学界で言われてはいるが活字にされていない見解を綿密に与えようとするものだった (XV, 19)。ポーは、我々の間の最も人気のある作家は、百人の内九十九人が “persons of mere address, perseverance, effrontery—in a word, busy-bodies, toadies, quacks” (XV, 2) などと厳しい表現でニューヨークの文人達を批判したから、この “Literati” は様々な物議を醸すことになり、ボストン戦争に引き続いて、ニューヨーク戦争と呼べる論争・訴訟を引き起こすことになった³⁵。ポーはこの “Literati” の序文でホーソーンを一般の人々に殆ど認められていない作家の例としてあげ、人々の眼にとまっても、僅かに褒められて非難される程度の眼にとまりようだと述べ、次のように言葉を続けた。

Now, my own opinion of him, is that although his walk is limited and he is fairly to be charged with mannerism, treating all sub-

jects in a similar tone of dreamy innuendo, yet in this walk he evinces extraordinary genius, having no rival either in America or elsewhere —and this opinion I have never heard gainsaid by any one literary person in the country. (XV, 4)

この“Ligerati”の言葉は、すでに“Marginalia 79”に見られた“mannerist”からきたマンネリズムという概念によってホーソーンの単調さを一方で批判し、しかし、他方でホーソーンの“extraordinary genius”を依然として高く評価するという、褒貶半ばする形をとっていた。この“Literati”の序文中の言葉は1847年の論評でそっくり引用されて論旨の出発点になるのだが、そこへ行くまでに、ポーとホーソーンの関係の上で唯一と思われることが起こった。それはホーソーンがポーに直接手紙を書いたことだった。

iii Hawthorne's Letter to Poe

ホーソーンは1846年に第二の短編集 *Mosses from an Old Manse* を出版することになった。そこで1846年4月30日付で、E.A. ダイキンク (Evert A. Duyckinck) に手紙を書いて⁸⁶、この作品の寄贈先を指示した。その一人にポーがあった。この手紙の日付から見ると、この指示をしたときに、ホーソーンが *Godey's* の5月号に載ったポーの“Literati”の序文の自分に関する記述を読んでいたかどうかは疑問である。しかし恐らく5月中にはこの記事を知ったことと思われる。というのは、寄贈を依頼したダイキンクは *Mosses* の出版社の Wiley and Putnam 社の編集顧問であり、かつては非常に優れた文学誌 *Arcturus* を編集し (Dec. 1840-May 1842)、後に *Literary World* (Feb. -April 1847) も編集し、当時の文学界の動向や文人達とも親しく、1850年にはメルヴィルとホーソーンを引き合わせてもいるほどで、1845年6月にポーの *Tales* が Wiley and Putnam 社から出版されたときには、その収録作品の選択をした⁸⁷。従って、ポーがホーソーンについて言ったことは、たとえホーソーンの眼に止まらなくても、ダイキンクの眼には止まっていたはずであり、ダイキンクを通じてホーソーンに伝わっていたと考えられる。

ホーソーンの *Mosses* は1846年6月5日頃には出版された³⁸。そしてホーソーンは寄贈した *Mosses* が着いた頃を見計らって、ポー宛に1846年6月17日付で次のような手紙を書いた。

... I have read your occasional notices of my productions with great interest — not so much because your judgment was, upon the whole, favorable, as because it seemed to be given in earnest. I care for nothing but the truth; and shall always much more readily accept a harsh truth, in regard to my writings, than a sugared falsehood.

I confess, however, that I admire you rather as a writer of Tales, than as a critic upon them. I might often — and often do — dissent from your opinions, in the latter capacity, but could never fail to recognize your force and originality, in the former.³⁹

これはホーソーンがポーに書いた恐らく最初で最後の手紙だと思われる。ホーソーンのこの改まった、そしてそれ故に、どちらかといえば冷ややかな印象を与える手紙は、ポーがホーソーンを評価したときに用いた“force”と“originality”⁴⁰をポーにお返しとして与え、短編作家としてのポーを高く評価してはいるけれども、批評家としてのポーの見解には異を唱え、ポーの批評を軽んじていることを改めて明らかにした。批評家としてのポーに対するホーソーンの批判は、自分の作品に対するこれまでのポーの評価——“Literati”の褒貶半ばする評言をも含めて——しか知らない人のものとは言い切れないように感じられると言ったら言い過ぎだろうか。ホーソーンの意識の片隅には、“The Hall of Fantasy”でホーソーンがポーのことを“the obnoxious class of critics”に属すると言ったことが間違っていないという確信があったに違いないと思われるし、ポーが引き起こしたロングフェロー戦争やローウェル批判、Boston Lyceum 事件などのボストン戦争についての批判もあったと考えられる。

この手紙が、ポーとホーソーンの間に冷たい溝を作るのに決定的な要因と

なってしまったと言っても過言ではない。というのは、当時のポーには様々な急迫した個人的事情の積み重ね（妻 Virginia の病気、ポー自身の病気、金銭的逼迫等）があったかもしれないが、この1846年6月17日のホーソーンの手紙や *Mosses* を贈られたことに対してポーが返事を書いた形跡は無く、ポーの *Mosses* の書評は一年半ばかり経た後の1847年11月になってやっと現れたのだった。

ポーのホーソーン評は、すでにこれまで見てきたように幾つかの段階を経て来ただけでなく、ホーソーンがロングフェロー、ローウェル等のボストン人とかかわりの中にいるという意識、1842年5月に用いた「ずうずうしい派閥」(XI, 110) の中の一人という意識、ないしはその疑惑、につきまわられていたと言える。批評家としてのポーについて冷たく批判的なホーソーンの手紙は、ポーに改めてこの意識を強く抱かせたといえる。この意識が非常にはっきり出たのが、1847年11月の *Godey's* に発表された *Twice-Told Tales* と *Mosses from an Old Manse* の書評の形をとったポーのホーソーン論の最後のものである。

ポーは1842年には、「ホーソーン氏はすべての点でオリジナルだ」と述べ、*Twice-Told Tales* をアメリカ人として「誇りに思う」(42/5, XI, 110) とさえ言っていたのだが、この1847年の評論でポーはホーソーンがドイツの作家 Rudwigh Tieck に似ていることを根拠にして、ホーソーンをオリジナルではなく、「ペキュリアー」(47, XIII, 154) だと決めつけ、これまでに取り上げなかったアレゴリー化の傾向を初めて指摘して批判し (47, XIII, 147-8)、さらにこの論評の結末を次のように結んだ。

“Let him mend his pen, get a bottle of visible ink, come out from the Old Manse, cut Mr. Alcott, hang (if possible) the editor of “The Dial,” and throw out of the window to the pigs all his odd number of “The North American Review.” (XIII, 155)

ここにはエマスンやロングフェロー、ローウェルなどの名前は表面に出てい

ない。しかしポーがトランセンデンタリスト達や、コンコードやボストンの文人・知識人達——ポーの表現を繰り返すと、1842年に「彼らの気取りを早い機会に暴くのが我々の全面的な目的なのだ」(42/5, XI, 110)と言った「ずうずうしい派閥」——を意味していることは瞭然である。ポーはホーソーンに彼らとのつながりを断て、と言うのである。

紙数の関係で、この評論そのものについての論議は稿を改めなければならないが、この評論のあと、二人の間には文通も書評もコメント類の様なものもなく、二人の関係は完全に断絶してしまった。ホーソーンは1850年3月に小説 *The Scarlet Letter* を発表し、小説家としても知られるようになっていったが、ポーは小説家としてのホーソーンを知らないまま、1849年10月7日に死んだ。

このように、1842年のポーのホーソーン論の後1847年を迎えるまでに、ポーとホーソーンの間にはかなり屈折した関わりがあったが、直接の接触が実を結ばないまま、二人の関係は終わってしまった。この稿を閉じるにあたって、一言だけ付け加えておきたい。

歴史における「若しも」という仮定の空しさは重々承知の上で、敢えて言うならば、若しもポーが1842年の *Twice-Told Tales* の書評で剽窃問題を持ち出さず、さらに、この書評の載った雑誌にホーソーンから借りることの多かったと思われる “The Mask of the Red Death. A Fantasy” を載せなければ、ホーソーンは “The Hall of Fantasy” の中で、批評家としてのポーのことを “obnoxious” などとは言わなかったかもしれない。そしてローウェルを介してポーが依頼した作品を送っていたかもしれない。そうなっていたなら、ポーとホーソーンの間にはもっと個人的な接触が生まれ、二人の関係はこれまで見てきたものとはかなり違ったものになっていたに違いない。その意味で、ポーの1842年の書評は、ホーソーンを高く評価し短編小説の理論を樹立したという功績と共に、いわれのない剽窃問題を持ち出したことで

二人の関係を歪める過ちを犯した功罪半ばする書評であったと言える。

しかしその一方で、ポーが早くからホーソーン作品の主題が偏り過ぎていて、多様性に乏しいと指摘したことは (42/4, XI, 103), 慧眼だったと言えるべきだろう。ただポーの批評には、ホーソーンが偏った、多様性に欠ける主題や人物を執拗に描いて何を求めようとしていたか、ということについての洞察が欠落していたことは明らかである。その点では1847年のホーソーン論も同じであって、この欠落を埋めたのが、ハーマン・メルヴィルの“Hawthorne and His Mosses”⁴¹ だったと言える。この評論はポーが死んで一年経たないうちに発表されたが、ここには、ポーの書評に欠けていた具体的な作品論が見られたばかりでなく、人間の弱さ・不完全さから生じる罪や墮落や悪への誘惑を執拗に描くホーソーンの暗い面についての考察があった。その意味で、メルヴィルの書評はポーの書評を補完する批評だったと言える。だが、ポーのホーソーン論について決定的なことを言う前に、1847年の評論をもう少し詳しく眺めて見る必要があることを忘れてはならない。

(以下次号)

注

- 1 1842年の評論は *Twice-Told Tales* の第二版の書評として、*Graham's Magazine* の4月号と5月号に掲載された。(The Complete Works of Edgar Allan Poe, ed. James A. Harrison (“1902”; New York: AMS Press, 1965), Vol. XI, pp. 102-104, & pp. 104-113.) 1847年の評論は *Twice-Told Tales* の第二版と *Mosses from an Old Manse* の書評として、*Godey's Magazine and Lady's Book* の1847年11月号に掲載された。(The Complete Works, ed. Harrison, XIII, pp. 141-155) 以下ポーの批評からの引用は Harrison 版に依り、巻数、頁数を本文中に示すが、必要に応じて出版年月 (42/4, 42/5, 47) を巻頁の前に付す。
- 2 『同志社大学英語英文学研究』47・48合併号に掲載した。以下「Poe の1842年の Hawthorne 論」と呼ぶ。
- 3 Cf. Hawthorne, *Mosses from an Old Manse*, “The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne” (Columbus: Ohio State University Press, c1974), X, 635-639. 以下ホーソーンからの引用はこの版に依り、Centenary と略す。

- 4 Hawthorne, Centenary, X, 635.
- 5 ポーと接触のあった Evert A. Duyckinck は, “Poe was sensitive to opinion. He sought, ... as I often witnessed, with an intense eagerness the smallest paragraph in a newspaper touching himself or his writings.” と書いている。(Quoted in S.P. Moss, *Poe's Major Crisis: His Libel Suit and New York Literary World* [Durham, N.C.: Duke University Press, 1970], p. xvii.)
- 6 Hawthorne, Centenary, X, 636.
- 7 ポーはローウェルについて, 1842年に “There is a young American who... has... composed far truer poems, merely through the greater propriety of his themes. We allude to James Russell Lowell.” (Poe, Harrison, XI, 68.) と述べた。
- 8 Poe's letter to Lowell, November 16, 1842, John Ward Ostrom ed., *The Letters of Edgar Allan Poe* (New York: Gordian Press, 1966), p. 217. 以下 Ostrom と略す; Lowell's letter to Poe, November 19, 1842, Charles Eliot Norton ed., *Letters of James Russell Lowell* (New York: AMS Press, 1966), I, 97-98. 以下 Norton と略す。
- 9 Poe's letter to Lowell, February 4, 1843, Ostrom, p. 222.
- 10 Poe's letter to Lowell, March 27, 1843, Ostrom, p. 232.
- 11 Lowell's letter to Poe, April 17, 1843, Norton, I, 105.
- 12 Sophia Hawthorne's letter to Louisa Hawthorne, April 17, 1843, quoted in Centenary, XV, 689, n. 6.
- 13 Lowell's letter to Poe, May 8, 1843, Norton, I, 106.
- 14 Hawthorne's letter to Lowell, ca. May, 1843, Centenary, XV, 684.
- 15 C.E. Frazer Clark, Jr., *Nathaniel Hawthorne, A Descriptive Bibliography* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1978), pp. 419-421.
- 16 正しくは *The United States Magazine and Democratic Review* だが, 以下 *Democratic Review* と略す。
- 17 「Poe の1842年の Hawthorne 論」, III 参照。
- 18 Poe's letter to Lowell, August 18, 1844, Ostrom, p. 261. Ostrom はポーが引用しているミケランジェロの2行がカブレットでないことを指摘し, 次の自由訳を与えている。“The best artist has no concept which a single marble does not contain within itself.” (Ostrom, p. 261 note.)
- 19 Hawthorne, Centenary, X, 306-320.
- 20 B.R. Pollin, ed., *The Brevities, Collected Writings of Edgar Allan Poe* (New York: Gordian Press, 1985), Vol. 2, p. 177. 以下 Pollin と略す。
- 21 *Ibid.*, 2, 181.

- 22 「Poe の1842年の Hawthorne 論」, IV 参照。
- 23 Poe, Pollin, 2, 181.
- 24 *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*, “Library of America” (New York: The Library of America, c1984), p. 702.
- 25 Longfellow’s letter to Lowell, March 15, 1845, Andrew Hilem ed., *The Letters of Henry Wadsworth Longfellow* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1972), III, 58.
- 26 *Poe: Essays and Reviews*, “Library of America,” p. 759. ポーのロングフェロー評および1845年の Longfellow War については Sidney P. Moss の *Poe’s Literary Battles; The Critic in the Context of His Literary Milieu* (Durham, N.C.: Duke University Press, 1963), pp. 132-189 に詳しい。またきっかけになったポーの書評・それに対する反論・反論の反論等は “Library of America” の *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*, pp. 696-777 に収められている。“secondary origination” については、ポーの次の言葉がある。“the poetic sentiment (even without reference to the poetic power) implies a peculiarly, perhaps an abnormally keen appreciation of the beautiful, with a longing for its assimilation, or absorption, into the poetic identity. What the poet intensely admires, becomes thus, in very fact, although only partially, a portion of his own intellect. It has a secondary origination within his own soul—an origination altogether apart, although springing, from its primary origination from without.” (“Library of America,” pp. 758-759.) ポーが他人の作品についてこの考えを適用せず、剽窃・盗用を厳しく批判しながらも、その一方で自分の創作に関してはこの考えを適用していたと思われることについては「Poe の1842年の Hawthorne 論」の IV で若干触れた。
- 27 Cf. Poe’s letter to Lowell, March 30, 1844, Ostrom, p. 247.
- 28 *The Broadway Journal*, August 16, 1845 (B.R. Pollin ed., *Writings in THE BROADWAY JOURNAL, Collected Writings of Edgar Allan Poe* (New York: Gordian Press, 1986, Vol. 3, p. 211.) ポーはローウェルの詩 “To the Future” の一節がワーズワスの “Song sung at Brougham Castle” の一節と類似していることを指摘したが、ポーは “rusting” を “rustling” と読み違えて批判してしまった。
- 29 Cf. Lowell’s letter to Briggs, August 21, 1845, Norton, I, 142-43. ローウェルはポーについて “Three fifths of him genius and two fifths sheer fudge” と述べ (J.R. Lowell, *A Fable for Critics, The Poetical Works of James Russell Lowell* [New York: AMS Press, 1966], IV, 67.), これに対してポーは、1849年3月の *Southern Literary Messenger* でローウェルを “a poor devil poet” と呼び、南部人の立場から次の様に

- 書いた。“Mr. Lowell is one of the most rabid of the Abolition fanatics; and no Southerner who does not wish to be insulted, and at the same time revolted by a bigotry the most obstinately blind and deaf, should ever touch a volume by this author.” (XIII, 169 & 171)
- 30 S.P. Moss, *Poe's Literary Battles*, p. 193.
- 31 この出来事そのものについては, A. H. Quinn, *Edgar Allan Poe: A Critical Biography* (New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1941), pp. 485-89 および S.P. Moss, *Poe's Literary Battles*, pp. 190-207 に詳しい。
- 32 Quinn p. 485.
- 33 Moss は *Poe's Literary Battles* において “Three events combined to cause Poe's downfall as a critic—his Boston Lyceum ‘hoax,’ his sentimental episode with Mesdames Osgood and Ellet, and the publication of his papers on the literati of New York City.” (p. 190) と述べている。
- 34 Poe, Harrison, XV, 1.
- 35 Moss, *Poe's Literary Battles*, pp. 221-248 に詳しい。また訴訟事件ならびにそれにまつわる論争の資料は Sidney P. Moss, *Poe's Major Crisis: His Libel Suit and New York's Literary World* (Durham, N.C.: Duke University Press, 1970) に解説付で収められている。
- 36 Hawthorne's letter to Duyckinck, April 30, 1846, Centenary, XVI, 158.
- 37 Cf. Ostrom, p. 290 note.
- 38 Frazer Clark, p. 124.
- 39 Hawthorne's letter to Poe, June 17, 1846, Centenary, XVI, 168.
- 40 Poe, 42/4, XI, 103 & 42/5, XI, 113.
- 41 Herman Melville, “Hawthorne and His Mosses,” *Literary World*, 17 and 24 August, 1850, in J. Donald Crowley ed., *Hawthorne; The Critical Heritage* (New York: Barnes and Noble, 1970).

Synopsis

A Study of the Relationship between Poe
and Hawthorne, Part II — 1842-1846

Nobunao Matsuyama

This article is the part two of my study of the relationship between E.A. Poe and Nathaniel Hawthorne and is sequel to my previous paper, “‘Something which resembles plagiarism’: A Study of the Relationship between Poe and Hawthorne — Poe’s Criticism of Hawthorne, 1842,” published in the combined issue of Nos. 47 & 48 of *Doshisha Studies in English* (『同志社大学英語英文学研究』) (March 1989). The present paper covers the years from 1843 through 1846, i.e., after Poe’s 1842 criticism until the publication of Hawthorne’s *Mosses from an Old Manse* in 1846 when Hawthorne sent a copy of this book to Poe and wrote a covering letter.

Hawthorne’s direct response to Poe’s 1842 criticism is not known. But in “The Hall of Fantasy,” published in James Russell Lowell’s *Pioneer* in February, 1843, Hawthorne referred to Poe as one of the “obnoxious” critics. Brief as this comment was, and expurgated as it was together with comments on other writers when this piece was included in Hawthorne’s *Mosses from an Old Manse*, it unmistakably revealed Hawthorne’s attitude toward Poe who in the 1842 criticism, while praising highly of Hawthorne’s genius, suspected Hawthorne of plagiarism on a false ground. (Of this problem, see my previous paper.) Poe was notoriously sensitive to any remarks on himself, but he

did not say anything about Hawthorne's comment, although it is easily imagined that Poe suppressed deep in his heart the chagrin he felt at Hawthorne's observations. For shortly before this Poe had began exchanging letters with Lowell and expected to receive through Lowell Hawthorne's contribution of a short piece to his projective magazine *The Stylus*.

Hawthorne seemed to have promised the contribution, but sometime in May he said to Lowell in a letter that he had "no power to produce anything good, at present." At about this time Hawthorne was almost every month contributing a work or two to *The Democratic Review* and some other magazines. As a matter of fact, he could not write anything more for Poe's magazine. And meanwhile Poe himself had to give up the project of his own magazine and thus an opportunity which might have connected Poe directly to Hawthorne died out for good. But Poe still kept an eye on Hawthorne's works appearing almost every month in various magazines, and in August of 1844, for example, Poe said of Hawthorne's "Drowne's Wooden Image," which came out in *Godey's Magazine and Lady's Book*, that it is "delicious."

However, many of the works Hawthorne published in 1843 and 1844 were, irrespective of their artistic merits, allegorical or, at least, allegory-like stories such as "Egotism," "The Christmas Banquet," "The Celcstial Railroad," or "The Brithmark." Most of them were to be collected in *Mosses* and exposed to Poe's attacks. But meanwhile Poe referred to some demerits of Hawthorne in No. 79 of his "Marginalia" which he began publishing in November, 1844. While yet praising Hawthorne as an excellent story-teller, Poe said, contrary to his remarks made in 1842, that Hawthorne is not always original in his entire theme

and insinuated Hawthorne's borrowing from himself again, which Poe had pointed out, as I discussed in my previous paper, on a false ground. Furthermore, Poe called Hawthorne "the most desperate mannerist of his day." Poe's response to Hawthorne in "Marginalia" reveals the shift from enthusiastic admiration to cool, objective and critical attitude—a reaction obviously incensed by Hawthorne's comment on himself as an "obnoxious" critic.

In 1854 Poe gave rise to the "Longfellow War" and "Boston War" as well, and blamed Lowell for plagiarism, again on an erroneous ground. These critical activities of Poe, colorful but ungraceful and involving some of Hawthorne's friends and acquaintances, must have led Hawthorne to fortifying his conviction that Poe is really an "obnoxious" critic. In 1846, in the introduction of "The Literati of New York City," which Poe began serializing in May, Poe cited Hawthorne as one of the authors who is not popular despite of his extraordinary genius. But here again, while evaluating Hawthorne highly, Poe attacked Hawthorne's mannerism and declaimed against his "similar tone of dreamy innuendo."

In June, 1846, Hawthorne sent a copy of his *Mosses* to Poe and wrote a letter, which is most probably the only letter Hawthorne ever wrote to Poe. In this letter, while showing his admiration for Poe's tales, Hawthorne unhasitatingly expressed his dissent from Poe's critical opinions. This letter, reserved and cold in tone, seems to have decisively widened the chasm between Poe and Hawthorne. For Poe's response to *Mosses* did not appear until one and a half years later, when Poe pulished his last criticism of Hawthorne in November, 1847, in which Poe attacked Hawthorne again on plagiarism and allegorical-

ness, but on a slightly different basis.

This 1847 criticism, which was to terminate the relationship between the two writers, will be discussed in its own right in my next paper, but the Poe-Hawthorne relationship from 1843 through 1846 seems to have been determined by two if's: if Poe had not said in the 1842 criticism anything about Hawthorne's plagiarism and had not published his "The Masque of The Red Death" in the same issue in which his criticism of Hawthorne was pulished, and if Hawthorne had sent a piece of his composition Poe solicited through Lowell, then their relationship must have been radically different from what it was. Looking back from our vantage point of view, I am allowed to say, I believe, that Hawthorne's remarks on Poe were right and that some of Poe's were also right but should be supplemented by Melville's observations in "Hawthorne and His Mosses" which came out in 1850 after Poe's death and after the publication of *The Scarlet Letter*.